# 終わりの中の始まり

美唄市医師会
美唄すずらんクリニック
福場　将太

医療の世界にまことしやかに流布する伝承がある。「医者は健康」。風邪や腰痛、高血圧といった日常的な病気はともかくとして、人生を揺るがすような難病に自分がなるはずがない、なってはならない…無意識にそう思っている医者は多いのではないだろうか。例えば名作『白い巨塔』に登場する財前教授は自らが癌になったことに驚愕するが、統計も熟知している癌の専門医であればむしろ一般の人よりも「まあなってもおかしくないか」と思って然るべきところである。

確かに医者は健康に関する知識があり、身近に医療があるわけだから、早期発見・早期治療という意味では病気になりにくいかもしれない。それでも難病が発症しない保証はない。事故に遭って障害を抱えない保証はない。一万分の一の確率でも医者の人口を考えれば自分がそうなっても何らおかしくないのに、科学者であるはずの医者が自らの健康についてだけは盲目的に不敗神話を信じてしまう。

しかし実際には難病や障害を抱える医者はたくさんいる。医学部入学時点で既にそうだった者もいれば、長い医者人生の中でそうなる者もいる。そして僕自身はその真ん中のような存在だ。進行性の網膜疾患であることは学生の頃から承知していたが、実際に生活や仕事が困難になるほど病状が進行したのは、医者の仕事を始めて数年が経過した頃からである。

正直なところ、本格的に見えなくなってもしばらくは何ともないふりをしていた。患者さんに対してもスタッフに対してもできるだけ悟られないよう努めていた。やはりそこには不敗神話への信奉があったと思う。しかし幸いにも精神科医だ。集団療法の中で誰かの弱さが誰かの力になる場面、受け入れることで障害が克服される場面、打ち明けることで痛みを乗り越えていく場面に幾度となく立ち会った。

その中で徐々に認知の修正が起こり、視覚障害を持つ医療従事者の集まりにも参加してみた。最初は居心地の良さを感じると同時に、ここに馴染んではいけないと意地も張っていた。しかし、同じような状態あるいはもっと大変な状態でもこの仕事を続けている人がたくさんいることを知り、ちっぽけなプライドにこだわっている自分がかえってかっこ悪く思えてきた。

そして平成30年秋、学生時代の先輩に誘われて僕は眼科の講演会に立った。視力を失った患者さんの中には絶望して心の健康まで失ってしまう人がいる。その人たちは精神科や心療内科では対象外とされやすく、かといって眼科で十分なメンタルケアが行なわれているわけでもなく、一人で心を閉ざしてしまうという。だから視覚障害の当事者でもあり心の医療者でもある僕に病気との向き合い方を話してほしいとの依頼だった。

以前の僕ならとんでもないと断わっていただろう。でも自分でも不思議なほど快諾でき、あれだけひた隠しにしていたことを大勢の患者さんの前で笑って話すことができた。さらに、こんな自分だからこそ研究できるテーマがまだ残っているのかもしれないと自分自身の行き先にほのかな希望も灯せた。

もちろん開き直ってはいけないと思う。迷いは常にある。きっとオートリバーステープのように心はまた反転して、病気を恨めしく情けなく思う日もあるだろう。今だって出会った全ての患者さんに自分の障害を告白できるわけではない。それでもこれからは、もしそれに気付いた患者さんがいたら、「ご名答。僕は目が見えない医者なんです。よく分かりましたね」と微笑みたいと思う。

僕の医者人生で不敗神話にすがった時代が終わる。実はもうとっくに終わっていて、病気のおかげで出会えた人たち、病気が教えてくれた心たちが人生を彩っているのだけど、それを認めるには随分時間を要した。寂しい気持ちもあるけれど、平成という時代が終わって新しい時代が来るように、終わりの中には必ず始まりがある。大いなる間違いかもしれない。自惚れた勘違いかもしれない。それでも今は新しい人生の始まりを信じていたいと思う。

どう考えても無理があった生き方でも、あたたかい患者さんたち、そしてあたたかい仲間たちのおかげでどうにかこうにか歩いているのだから。

まだ当事者としても医者としても未熟な自分。それでも、もしこの文章を読んでくださった方の中に不敗神話に苦しんでいるお医者さんがおられたなら、一言だけ伝えたい。

大丈夫、道はある！